



横浜市立荏田東第一小学校

◆〒224-0006 横浜市都筑区荏田東三丁目5番1号

◆Tel…045-941-7630 Fax…045-942-9464

◆http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/edahigashi/

優しさとは想像力

学校長 熊谷 潤平

本校名物「どんちゃか祭り」。今年度は、東京パラリンピック2020で一層有名になった「ボッチャ」を中心とした活動になりました。お陰様で、どんちゃか祭りは大盛況で、連日体育館から子どもたちの明るく健康的な歓声や拍手が聞こえてきていました。笛や太鼓はないけれど、「どんちゃか」の名にふさわしい賑わいでした。子どもも大人もすてきな笑顔が弾けていました。事後のアンケートには、「ボッチャをできる機会なんてあまりないと思うし、『できた!』があってとても楽しかった。」「サポーターさんたちがしっかりルール説明をしてくれて、とても楽しくボッチャができた。」などの子どもの言葉が。今年の活動内容を発案し、惜しみない協力と支援を下されたPTA役員・委員の皆様には、ただただ感謝申し上げるばかりです。本当にありがとうございました。



さて、このボッチャを始めとして、日本選手団が大活躍した今夏の東京パラリンピックでしたが、その教育的意義について、東京大学の星加良司准教授が興味深いことを雑誌の中で述べています。

コロナ前に東京都主催のパラリンピック応援シンポジウムで講演したのですが、私は「児童・生徒が観戦した後、『感動しました』とか『あのアスリートがあんなにがんばっているんだから、自分も明日からがんばろう』などと目をきらきらさせて帰ってくるようなら、パラリンピック教育は失敗だと思ってください」と話しました。みなさん、ポカンとされていましたが。

「公平」の価値から考えるならば、～中略～パラリンピックは五輪とは別で行われている。なぜなんだろう？と児童・生徒がモヤモヤしながら帰ってきたら、パラリンピックは成功と言える私は話しました。  
(教育開発研究所「月刊教職研修 2021.12」より)

星加先生は、障害学が御専門で、御自身も全盲です。御自身に視覚障害がある先生の実感のこもった言葉は鋭く、迫力と説得力があります。「パラ選手はすごい、偉い、かっこいい!」だけの感想で終わりにしてほしくない、ということかなと私は受け止めました。確かに、素直さが、単純さ・浅さ・淡泊さにならないようにはしたい。

それでも私は、子どもたちに、「感動しました。」「自分も頑張ろう。」と思える素直な感受性を、ひるむことなく育てたいと思っています。あの一生懸命な姿は、やっぱりすばらしいから。と同時に、星加先生が指摘するように、「オリ・パラは別々で行われる。ならば、平等・公平ってなんだろう。」「障害があるなしで別々に大会が行われたら、平等・公平とはいえないのかな…。いや、でも、なんか違う気もするな。難しいな。」という、鋭さ・深さ・慎重さもまた、確かに育みたいと思います。

とかく私たちは、自分とは異なる(と感じる)存在、自分の理解の範疇を超える存在、あるいは少数派の存在に対し、想像力と受容性が不足しがちです。障害の有無、ワクチンを打った打たない、性格が外向的・内向的、集団が好き・独りが好き、肌の色、髪の色、国籍、性別、性的志向・性的自認…など、「多数と少数」の類別事例は挙げればきりがありません。怖いのは、想像力の不足が、ときに、差別やいじめにもつながるといことです。

今年は12月4日から10日までが、世界人権宣言採択にちなんで「人権週間」となっています。本校でも明日の朝会講話からその取り組みが始まります。自分とはどこかが少し違う誰か、全体から見れば少数派の誰か、の「心」にも思いを馳せ、想像力という優しさをもつ「えだわん」でいよう。子どもたちに望む以上、まずは範となるべき我々大人から想像力を豊かにせねば、と思います。